

天皇とお庚申さま

今坂柳二

石無坂の途中にお堂かお宮か、ちっこい建物がほっそ立っているのをご存じかな。わしがこれから話そうと考えちよる上諏訪の庚申さんの祠じゃよ。んで、庚申の神は怖ろしい神でな、気が向かぬことをするとたちまち祟りがあるって伝えられとる。

例えば、こんなことがあったそうだ。ある年大雨が降って崖が崩れ、ゴロゴロドツシン。なんと庚申さまは北向きになって止まった。



庚申さん前の石無坂

稲荷山へ落葉掻きに行く婆さま、台地の上の畑へ諸堀りに行く爺さま、誰も見て見ぬふりさ。ところが、この村に、間もなく災難がふりかかる。雷が落ちて火事になる。童が風邪をひいて亡くなる。あそこの孫が河童に引き込まれた。隣の俵が天狗さまにさらわれたとか。

おいおい、こりやどういう訳だんべ、半年のうちに若いもんが十人も死んだぞ、先日の火事は十軒も燃えた。もしかか？どうした？南に向いてた庚申さんが北向きに置きっ放しだ、そうだそうだ、早く元通りにしなくちゃあ、となりまして、めでたくもご覧のようになった。そんなことあります。

百年経つか二百年か、大正元年の陸軍大演習の数日前だ、勲章ピカピカの軍人さんがやってきた。

「これ、村長。神か仏か知らんが、ここは天皇が稲荷山にお登りになる道であるぞ。もしもご乗馬がふんづるべったり、けつまづいたりしたら大変だ。大急ぎで片付けてしまえ」

「とは言いまして、右はイノシシだつて登れぬ崖で、左はわしらが村まで続くダラダラ坂です。お庚申の像が転げ出すなんぞすると、三人や五人、潰されてしまいます」

「何を言うか、天に二人といたない天皇だぞ、それが分からぬのか」

軍人さんと村長さん、その後どんな駆け引きがありましたもんやら、それは霞の向こう側のこと。庚申さんは平成のいまも南向きのまま、人々を見守っておられます。たぶん、天皇の手綱さばきがお上手だったんでありますよな。



庚申さんの祠

いまさかりゆつじ 狭山市笹井在住。二十四歳から俳句に關わって、現在同人誌「つばさ」代表。かたわら、昔ばなしの採集・採話を続け、「龍じいの昔ばなし」以下九冊発行。

編集後記

総会も終り、新年度となり、青少年文化体験フェスタも間近にせまってきました。さねとう あきら先生追悼特集号を発行して直ぐの会報で、原稿もレイアウトも、大忙しでした。

6月5日の市民会館大ホール「声で紡ぐ物語の世界、二人のあきらさんとともに」に行き、先生の作品の朗読、奥様のお話、今最も忙しいジャーナリスト 池上彰さんのお話、面白く楽しかった。文化的行事に満員の客席、プログラムと共に「文化のいぶき さねとう あきら先生追悼特集号」が配られた事、次の7月16日(土)「さねとう あきら先生を偲ぶ ～作品と世界観～」(小ホール)も楽しみです。

(高沢正夫)